

【登場人物】

女 男

緞帳が上がる。

床に正座し、白い紙に向かって、男。
その横で立っている女、の手にはお盆、の上に湯のみ。

男 ……

女は近くでもなく遠くでもなく、ちょうどいい場所に立っている。

女 ……

紙のそばに置かれた、ペン。男の手は、まったく動いていない。

女 あなた

男 ああ、どうした

女 お茶いれました

男 ありがとう、あとで飲むから、そこに置いていてくれないか
女 はい、

問。

女 ……どう？

男 だめだ

女 そう、

男 すまない、

女 いいの、

男 僕がこんなで、きみの方がつらいことはわかっているのに、
女 いいの、そんなに自分を責めないで、

男 ほんとうにすまない

女 あやまらないで

男 ……うん、

女 ううん、あなたがつらいことは痛いほどわたしもわかってる、わたしもつらいけど、ううん、もしかしたらやっぱりわたしのの方があなたよりもつらいかもしれないけど、でも、もしそうだとしても、あなたがそのぶん、さらにつらい思いをすることもわたしは知っている。だから、やっぱりわたしのの方があなたよりつらいなんてことはない。そして、どちらがよりつらいかなんてはなしは、やっぱり意味がない。だって、このつらさは二人のもの。あなたがつらいぶん、わたしもつらい。わたしがつらいぶん、あなたもつらい。いつだって同じつらさを二人で分かち合っているんだから、

男 ありがとう

女 ううん、わたしの方こそありがとう

男 ……でもね、僕は思うんだ。僕たちがこんなに傷ついているのと同じように、傷ついている人が世の中には沢山いる、そして、それは今までだったんだ。僕たちが想像しようが、しまいが、悲劇はいつだってあった。まさか自分がその悲劇の登場人物になるだなんて、以前の僕は考えてもいなかった。それが僕の罪だったのかもしれない。

女 そんなに自分を責めないで、

男 わかっている、だいじょうぶ、

女 でも、

男 たしかに、かつての僕は悲しみに無頓着だった。でも、そんな僕の作品でも、すこしは人の役立ってたのかもしれない

女 そうよ、きつと、そうよ

男 だったら、僕が今すべきことは、悲しみに暮れて日々を過ごすことなんかじゃない。今、まさに、僕と、そして、君と、同じように傷ついている誰かをすこしでも笑顔にするために、すこしでも元気にするために、今こそ、このペンを動かすべきなんじゃないかって

女 そうよ、きつと、そう、

男 描く、僕は描くよ

女 がんばって、

男 お茶、ありがとう！

間。

女 ……どう

男 やっぱりだめだ

女 そう、

男 どうして、どうして、たった4つの四角を埋めるだけじゃないか
女 そんな言い方しないで、その4つの四角の中に無限の可能性が宿っていることを教えてくれたのは、あなたじゃない

男 そうだけど、僕は、もう、その夢を信じていることができなくなりつつある
女 だめ、そんなこと言っちゃだめ

男 愉快痛快な話を思い浮かべる

女 思い浮かべて

男 笑ってしまうような話を考える

女 考えて

男 思わずズッコケてしまうような話をつくりだせ

女 つくりだして

男 ……

女 ……

男 ……なにも、なにも、思い浮かばない

女 ……

男 悲しみ以外、なにも、浮かばない

女 ……

男、立ち上がって、

女 あなたどこへ

男 電話してくる

女 須藤さん？

男 ああ、今週も休みにしてもらおう

女 でも、今週も、今週も、つてもうずっとお休みにしてもらってるじゃない

男 そうだね

女 うちのカレンダーが間違ってるじゃあ、もう100と44週よ

男 もうそんなか

女 144週って、月で言ったら36カ月よ、年で言ったら3年よ

男 そうだね
女 もう、なんで週で言ってるかわからないぐらいの数字よ
男 そうだね
女 それなのに、またお休みだなんて言ってる須藤さん怒らないかしら
男 だいじょうぶだ
女 どうして、どうしてだいじょうぶだなんて言えるの？
男 だって、須藤さんはやさしいから
女 ……
男 144週休んでも一度も怒らないくらい須藤さんはやさしい
女 ……
男 でもそのやさしさに甘えてちゃだめなんだ
女 そうね
男 だから、もう、最後にするよ
女 最後って
男 「ゆかいっーかい☆飛び出せ！げんきくん」、は144週前を持って終了にしてもらう
女 そうね、そうしてもらうのがきつと一番いいんだわ
男 ああ、そうしてもらうのが一番いい、唯一、心残りなのは最終回をちゃんと迎えられなかったことだ
女 そうね、144週後に突然、144週前が最終回でしたって言われても、わたし、もう、その144週前がどんな内容だったか、思い出せる自信がない
男 君が思い出せないのも無理はない、なにしろ書いた張本人の僕ですらどんな話だったかさっぱり思い出せないんだからね
女 そう、じゃあ、読者が覚えている可能性は皆無でしょうね
男 そもそも「ゆかいっーかい☆飛び出せ！げんきくん」に読者なんていたのかどうかもうたがわしい！
女 あなた！いくらなんでも、それを言っちゃいけないわ！
男 ……すまない
女 ……いいえ、わたしこそ、ごめんなさい

間。

男 ……須藤さんに電話してくるよ
女 気をつけてね
男 だいじょうぶ、たった数メートルの廊下を自分の足で歩くんだ
女 そうだけど、気をつけてね
男 ありがとう
女 はい
男、去る。
女 ……
女、しばらく立っていたが、男が座っていた場所へ。
女 ……
女、おもむるにペンを手を取り、
女 ……
女、何かを描きだす。
女 ……
女、描き終わって、
女 ……あ、あ、
男、戻ってくる。
男 ……どうしたんだい？
女、急に立ち上がって、

「つくりばなし」

女 ちがうの！ なんでもないの！
男 どうしたんだい、そんなに急に慌てて、転んでしまうよ
女 ごめんなさい！ ごめんなさい！
男 どうしたんだい、落ち着いて、
女 よかれと思って、わたしよかれと思って、すべてはあなたのことを思って
男 わかってるよ、きみがいつもそう考えてくれていることは、わかってる
女 それなのに、ああ、わたしったらなんて恐ろしいことを、
男 もしかして、まさか！

男、紙を見る。

男 こ、これは、……「ゲルニカ」
女 ああ！（顔を覆って崩れ落ちる）
男 1937年4月26日、スペイン北部バスク州の小都市ゲルニカでナチスドイツによる空爆があった、それを知ったパブロ・ピカソが、パリで準備中だった万博の、スペイン館の壁に描いたという、あの「ゲルニカ」じゃないか、これは
女 あなた、もうそれ以上は言わないで
男 これを君が？ あの短時間で？ このGペンで？
女 もう、堪忍して、
男 すごい、すごすぎて、言葉もないよ、一コマ目にキレイに「ゲルニカ」が収まっている、僕よりもよっぽど才能があるんじゃないか、よもやピカソをも
女 ああ、あなた、どうか、ゆるしてゲルニカ
男 ……僕も君にあやまらなければいけないことがある
女 ……なにかしら？
男 須藤さんに言ってしまったんだ
女 なにを？
男 「ゆかいっーかい☆飛び出せ！ げんきくん」は、今週号をもって、終わりにして欲しいって
女 え、それって、あなた、まさか、
男 そう、僕はついさっき君と話したことをすっかり忘れて、最終回を描くこ

とに決めてしまったんだ。その廊下を歩いているうちにね、ほら、そこさ
女 あなた、それはすばらしいことよ、そうだったらいいとわたしずっと思っ
てた
男 そう言うってくれるかい！
女 もちろんよ！ それなのに、わたしったら、なんてことを……
男 ちがうよ、君も同じ思いだったことがこれで証明されたんじゃないか
女 ……そうなの？
男 そうさ、僕たちは、一緒に、この一コマ目を描いたんだ
女 あなた……
男 きみ……

二人、見つめ合う。

男 それ、144週間ずつと悩んでいた一コマ目がやっと埋まったんだ、もう
終わったも同然だ、さあ、続きを描こう
女 あなた、お願い
男、床に座り、机に向かって、
女 どう？
男 ……だめだ
女 ……
男 逆にもっと難しくなった！
女 ああ！
男 これだったらまだ全コマ真っ白だったときのほうがどんなに気楽だったか
女 ああ、本当にごめんなさい
男 ああ、すまない、君を責めるつもりじゃなかったんだ
女 いいの、わたしがぜんぶ悪いんだから
男 だいじょうぶ、僕がなんとかする
女 ねえ、ふたコマ目はスペインでげんきくんが「ゲルニカ」を眺めているっ
ていうのはどうかしら
男 ……愉快痛快になる気がしないな

「つくりばなし」

女 ごめんなさい

男 いや、うそだ、僕に力量がないだけだ、君を言い訳にしまった

女 「ゲルニカ」の顔がげんきくんの顔に徐々にフェードチェンジしていくってのはどうかしら

男 それも、とてもまずい気がするよ

女 そうかしら

男 うん、とてもじゃないけどげんきな気持ちになれそうにない、そして実は

僕はげんきくんの顔をよく思い出せない

女 そう言われればわたしもそうだが

男 げんきくんに顔があったことすら忘れそうだ

女 「ゲルニカ」はげんきくんが着ているトレーナーだったってのはどうかしら

男 うん、それはとてもいい気がするよ

女 ほんとに

男 ほんとだとも、今年一番いい、トレーナーっていう響きがいい、一気に軽

くなった気がする

女 あなたおだてすぎよ

男 ただひとつ欠点があるとすれば、どうして一コマ目でげんきくんのトレー

ナーがアップになっていたかまったく説明がつかないことだ、だが、そんな問

題が問題に感じないぐらいにパーフェクトなアイデアだ

女 じゃあ……

男 ああ、決定だ！

男、ペンを走らせる。

女 夢みたい

男 でも夢じゃない、144週も真っ白だった4つの四角のうち、ふたつも埋

まったんだ

女 ……あなた、4つのうちのふたつって、もしかして、

男 そうだよ、半分だ！

女 ああ、神様、神様、

男 だめだ、お礼を言うにはまだ早い

女 ああ、そうね、わたしったら気が早いんだから、まだトレーナーを着たげ

んきくんが出てきただけだわ

男 何も起こってないに等しいね

女 しかも、もう半分まで来てしまった

男 はたしてこれで愉快痛快な結末が訪れるんだろうか

女 だいじょうぶ？ あなた、だいじょうぶ？

男 ここが山場だ

女 信じてる

男 僕にまかせて

男、紙に向かう。

男 ……

女 ……どう

男 まあ、だめだよ

女 うん、そうよね

男 実質、二コマ漫画になっちゃったからね、これは四コマの倍難しいと言っ

ても過言ではない

女 ねえ、あなた、わたしひとつ気がついたことがあるんだけど

男 いや、君は自分ではそうとは思ってないかもしれないけどよく気がついて

いる、その数はおそらくひとつじゃない、なんだい

女 この漫画、まだ一人しか出てきてないわ

男 本当だ、それはまったく気がつかなかった！

女 これじゃ、いくらなんでも寂しいわ。早く、早く！ 新しい誰かを登場さ

せましようよ！

男 でも一体、誰を？ 主役の顔を忘れていた僕たちが脇役をおぼえているは

ずがない

女 それもそうね、他に誰がいたのか皆目検討もつかないわ

男 考える、考えるんだ、主役の名前がげんきくんなんだから、

女 あなた、

男 病気くん

女 あなた

「つくりばなし」

男 けがちゃん
女 あなた
男 不運マン
女 あなた
男 犯罪さん
女 あなた
男 災害ばあさん
女 あなた
男 こむら返り先生
女 あなた
男 事故鳥
女 あなた
男 戦争寺の戦争和尚
女 あなた！
男 静電気レディ
女 あなた！ もうやめて！

問。

男 僕は、一体、何を……
女 ……
男 僕の世界には、こんなものしかないのか、
女 違うわ、いまは、ただ、あなたの目に、そんなものばかりがうつっているだけ
男 でも、
女 そうじゃないものもたくさんあるわ
男 確かに、そうかもしれない、でも、今の僕にはきつと見えない、そして、
女 描けない
男 あなた、
男 だめだ、なんだかすべてが、バカらしくなってきた。はは、ひどい、ひどいぞ、これはひどいな。やめだ。全部やめだ！
女 やめって、

男 もうやめよう。こんなものに、意味も、価値もない。だって、見てもらん。誰が、こんな話を面白がる。どこの世界にこんな話を必要とする奴がいる。ゲルニカ柄のトレーナーだって？ アホか！

女、男の前に立ち、頬を叩く演技。
自分の手のひらを打って音を鳴らす、古典的な動作。

男 ……どうして、
女 ……
男 どうして僕の顔の前で手の平を打って音を鳴らした！
女 ……ごめんなさい、でも、アホはあなたよ、いえ、わたしもよ、
男 ……
女 ねえ、わたしたちって一体、何を悲しんでいたの、
男 え？
女 ねえ、あなた、答えて、わたしたちは、一体、何を、悲しんでいたの？
男 そ、それは、

問。

女 思い出せないんでしょう、
男 ……そんな、バカな、
女 わたしもよ。たしかに、何か、何か、あったんでしょう、つらく、悲しいことが、それはもしかしたら気がおかしくなってしまうぐらいのことだったのかもしれない。だけど、今のわたしたちはなに？ 自分が何を悲しんでいたのかすら忘れてしまって、ただ悲しみを悲しんでいるだけのクソじゃない
男 言葉が悪いよ、
女 そんなことはない。あなた、はじめの方で言ったわ、同じように悲しみにくれている人をこのペンで元気にしたいって、
男 たしかに言った、
女 でもね、誰かのため、なんて考えがきつと間違い。だって、わたしたちは、わたしたちのことで精一杯。でも、それでいいじゃない。わたしたちのためのお話があってもいいじゃない。ねえ、わたしたちのためにお話をつくって、あ

「つくりばなし」

なた自身のためにお話をつくって、

男 ……

女 見て、ほら、ずっと何もなかったところに、げんきくんが帰ってきた、いいえ、わたしたちはもう一度、げんきくんを生んだ。その素晴らしさはあなたが一番、わかるはずでしょう。だから、そんなこと言わないで、お話をやめようとしなさい、

男 ……

女 ごめんなさい、

男 ……いや、僕の方こそ、すまなかった

女 ……いいえ、わたしの方こそ、長台詞ごめんなさい

男 いや、いいんだ、言うほど長くはなかった、そして、おかげで僕は目が覚めた

女 ……

男 僕は、僕ときみと、そして、げんきくんのために、この話をやめない

女 ありがとう

男 さあ、もう一度、考えよう、ゲルニカ、柄のトレーナーを着たげんきくん、そこに誰かを、登場させよう。でも、絶望や悲劇なんてもうまっぴらだ、さあ、誰がやってきたらいい、考えるんだ、

女 ねえ、あなた

男 どうしたんだい

女 げんきくんも人の子よね

男 たぶん、

女 だったら当然、母親がいるんじゃないかしら

男 ……

女 どうかしら

男 ……たしかに君の言うとおりだ

女 ほんとに！

男 ああ！

女 お母さんがげんきくんを迎えに来るっていうのはどう
男 それだよ、それだ！

男、ペンを走らせるが、

男 ああ、でも、144週のブランクで、僕のタッチはバラバラだ、顔だけ

じゃ、二人が親子だとは誰も気がつかない

女 ねえ、お母さんも、同じトレーナーを着ているっていうのはどうかしら

男 それは？

女 同じ、ゲルニカ柄のトレーナーを着ているの

男 ペアルックか！ その手があった！

女 でも、恋人に見えちゃうかしら、

男 よし、じゃあ、やじるしでげんきくんのお母さんと書いておこう

女 それがいいわ

男、ペンを走らせる。

男 お・か・あ・さ・ん、できた！

女 できたわね！

男 ああ、あとヒトコマだ

女 ええ、あとヒトコマよ

間。

二人 ねえ、

男 え？

女 え？

男 ……今、僕の頭の上にはひとつの考えが浮かんでるんだ

女 ……わたしの頭の上にもひとつの考えが浮かんでいるの

男 じゃあ一緒に言おうか

女 ええ、そうしましょう

間。

二人 げんきくんのお父さんがやってくる

男 やっぱり同じだったね！

「つくりばなし」

女 もちろん同じだったわ！

男 でも、お父さんが出てくるだけでいいのかな

女 どうして？

男 だってこれで最後なんだよ、他にになにか必要なものはないかな

女 どうして？

男 え、

女 ……げんきくんがいて、お母さんがいて、お父さんがいる。三人がそろって、みんな元気。それ以外に、ほかに何が必要だというの？

男 ……そうか、

女 そうよ

男 じゃあ、ついに、

女 そうよ！

男 ついに、完成したんだ！

女 おめでどう！

男 コマいっぱいの「ゲルニカ」の絵、

女 しかし、それはげんきくんのトレーナーだった

男 そこにあられるげんきくんのお母さん、ペアルック

女 そして、最後にやってくるのはげんきくんのお父さん、トリプルック

男 三人はただ一緒に立っていて、

女 みんな元気

男 そこには、言葉すら必要はない

間。

男 ……完璧だ

女 完璧よ

男 君のおかげだ

女 ……ううん、そんなことないわ

男 どうして、そんな悲しそうな顔をしているんだい

女 だって、……これで、げんきくんとはお別れなんですよ

男 ……そうか、忘れていた、これが最終回だったんだ

女 ええ、そうよ、……さようなら、

男 さようなら、げんきくん

女 さようなら

男 さようなら！

女 さようなら！

男 さようなら！

女 さようなら！

男 さようなら！

女 さようなら！

男 さようなら！

女 親子三人、仲良く暮らすんですよー！

男 暮らすんだぞー！

女 げんきでねー！

男 そりゃげんきだろー！

女 そりゃそうかー！

男 げんきくんなんだからー！

女 げんきくんだもんねー！

二人、泣いているのか、笑っているのか。

男 僕は、自分が、何を悲しんでいたのかやっと思いついた気がするよ

女 ええ、わたしも何に悲しんでいたのかやっと思いついた気がする

男 ……悲しいね

女 死ぬほど悲しいわ

男 でも、この悲しさは、すこしなつかしい

女 ええ、この悲しさは、すこしあたたかいわ

男 ああ、

男、紙を手に取り、

男 須藤さんに原稿を渡してくるよ

女 ……ねえ、あなた

男 どうしたんだい

「つくりばなし」

女 げんきくんを続けさせてもらおうことってできないかしら
男 ついさつき、あんなにさよならしたのに？

女 ついさつき、あんなにさよならしたのに。……なんだか、わたし、急に、怖くなってしまったの、だって、げんきくんまでいなくなったら、わたしたち、また、あの悲しみを悲しむだけの日々に戻ってしまうんじゃないかって
男 だいじょうぶ

女 どうして、どうしてだいじょうぶだなんて言えるの？

男 そのときは、新しい話を、僕が描く

女 あなた、

男 悲しみを忘れないための、そして、悲しみを一瞬だけ忘れるための話を僕が描く

女 ……ありがとう

しばしの間。

男 行ってきます

女 行ってらっしゃい

男、出て行く。

男、すぐに戻ってくる。女の目の前へ。

男 大事なことを忘れていた（お茶を飲んで）おいしい、ごちそうさまでした

女 おそまつさまでした

男 行ってきます

女 行ってらっしゃい

女、男を見送り、

女 ……

女、どこかにいってしまう。台所だろうか。

ゆっくりと舞台、暗くなっていく。

女の姿が消え行く前に、暗転。

「げんきくん」おしまい。

本作品の著作権は、作者である柴幸男に帰属します。

上演許可などのお問い合わせは、作者の所属する劇団「ままごと」まで。
上演をする際は有料無料に関わらず、必ずご連絡ください。

おまじゆ HP www.mamagoto.org

MAIL mamagoto.org@gmail.com